遺　作
Another

浅川琴未
～悦教の章～

0　序
1　どす黒いビデオテープ
2　喜悦の刻印
3　歪んだ性愛教育

（体験版はここまで）

4　処女の卒業式
5　覚え込まされる性の悦び
6　浣腸天使・前
7　浣腸天使・中
8　浣腸天使・後
9　二度目の処女喪失
10　口淫授業
11　悶える肉体、抑えきれない性欲
12　陥落
13　結

0　序

七月二二日、桜蘭学園は他のほとんどの学校と同じく終業式を迎えている。
式はすでに終了し下校するばかりとなっていたが、三年生の教室では幾人かの生徒が残って夏休みの予定などを話し合っていた。
窓を開け放しているとはいえ、教室は夏らしい暑さを保っている。数日前から鳴き始めた蝉と手加減のない陽射しが、皆の外に出る気を萎えさせていた。
陣八は悪友の健太がだらしなく席にへばりついて動かないため、仕方なく駄弁りに付き合っていた。
「うっぷ……」
健太がえずきかけて机に突っ伏した。
「なんだよ汚いなぁ」
隣の机にもたれている陣八が顔をしかめる。
「昨日親父と飲みすぎた」
「健太君、未成年はお酒飲んじゃいけないんだよ」
窺うような眼差しでたしなめたのは琴未である。
「う、梅酒だよ、梅酒」

「アルコールじゃないか」
「う、うるさいなあ、お前は教育委員会か」
「臭いまでしてるぞ。よく先生にばれなかったな」
「梅とご飯と麹を一緒に食べたら体内で発酵してアルコールになっただけだ」
「なんで麹なんか食べるんだよ。そんな言い訳するの健太だけだよ」
「ふふふ」
琴未はなごやかに微笑む。
お嬢様らしく柔和な少女で、学校の生徒のほとんどが彼女の存在を認知していることからも、どれほど端正な容姿かがよく分かる。軽くウェーブがかかった髪を大きなリボンで飾っており、それが彼女をやや幼く見せていた。少女っぽい容貌とは対照的に胸は平均以上の豊かさに育っているため、アンバランスな魅力を帯びている。
「それより健太、早く帰らないと校門が締まっちゃうぞ」
「遺作扉を使えばいいじゃないか」
正門の脇の通用門のことを、生徒間ではそう呼んでいる。正門が開いているにもかかわらず、いつもわざわざその通用口を使う用務員の伊頭遺作が由来だ。
「そうだけどさ……」
遺作の名前が出た途端、陣八と琴未は顔を曇らせる。
「健太君よく怖くないわね、あの用務員のおじさん」

「怖くはないけど、気持ち悪い奴だよ。テニス部の部室からテニスウェアを盗んでるような変態だし」
「でも健太、あれは証拠が……」
陣八は遺作の話題に触れたくなかったので、否定的な見解を示した。
「廊下ですれ違うとき、俺はちゃんと見たぞ。あいつすぐに後ろに隠したけど、確かにテニス部のウェアだったからな」
「私も……」
と言いかけて、琴未は口をつぐんだ。
「あいつに何かされたの、琴未ちゃん」
机に顎をつけたまま、健太が目線を上向ける。
「されたわけじゃないけど、階段で下から私のスカートを覗くようにしてたから、思わず『やめてくださいっ』て」
「むぅっ」
不愉快そうな顔を浮かべた健太が、跳ねるように上半身を起こした。
「そしたらおじさん『俺はゴミを拾おうとしてただけだ』って怒り出して、『あとで用務員室に来い』って」
「それで？」
先を促す健太の声が硬くなっている。

「怖かったから行かなかった」
「行かなくて正解だよ。行ってたら何されてたか分からないぜ」
「スカートの丈がもっと長ければいいのに」
スカートのチェック柄に目を落としながら、琴未が不満そうに呟く。
理事長の趣味らしく、桜蘭学園の制服のスカートは他校のそれよりやや短い。
「とにかく早く帰ろうよ」
陣八が健太の鞄を取って押し付けたので、仕方なく健太も立ち上がった。
「しょうがないなあ」

自宅の方向が違うため裏門から帰る琴未と昇降口で分かれ、陣八と健太は正門へと向かった。
「まだ捕まらないのかなあ、あの事件の犯人」
屋外に出た途端に浴びせられる直射日光に目をひそめ、健太が呟いた。
「え？」
「犯人は遺作だと思ったのに」
一年前の夏休み、健太たちの一学年後輩の女子生徒が何者かに殺害され、遺体が校舎裏で発見される事件があった。

「よ、よせよ。あの人は犯人じゃないって警察も言ってただろ」
事件発生当初、遺作は誰からも疑われる存在だったが、犯行時刻には理事長の自宅にいたことを理事長が証言したため、早々に容疑者リストから外れたという話だ。
「あの事件は違うにしても、別の所で事件を起こしてても不思議じゃないぜ。陣八だって、あいつが女子の体操着盗んで問題になったのを知ってるだろ」
「知ってる……けどさ」
「いきなり女子に抱きついたり、なんでクビにならないんだ？」
「騒ぎになって学校の名前に傷をつけたくないからじゃないかな」
「俺が理事長だったらすぐにクビにしてやるのに」
そういう健太も問題行動の多い、いわゆる悪ガキで人のことを言えたものではない。ぶっきらぼうで勉強の成績は良くないが、頭脳そのものの回転は早く端正な顔立ちのため、女子生徒から密かな人気がある。
ここ数日連続して猛暑日が続いており、数十メートル歩いただけで汗が浮き出てくる。
閉じきられた正門の前までやってきたところで、二人はざらついた低い声をかけられた。
「おい、さっさと帰れ」
陣八が声がした方向を振り向くと、視線の先では用務員の遺作が立っていた。

拗ねたような顔をした中年男で、薄い無精ひげを生やし、風呂にも入らないのか腕まくりした袖から露出した肌は灰色がかっている。
いつも通り薄汚れたジャージ姿で、黒ずんだ手ぬぐいを首にかけていた。
「もう下校時間は過ぎてるぞ。学校はお遊戯場じゃないんだ」
「帰るところだよ。見て分からないのか？」
遺作が琴未の下着を覗いていたという話を聞いたばかりということもあって、健太は挑戦的になっている。
「なんだ、その口の利き方は。年上の人間は敬うもんだ」
「歳をとればいいってもんじゃないだろ」
「おい健太、よせよ……」
「ふん……お前の身体には悪魔が宿ってるようだな。俺のことを馬鹿にする奴には、みんなバチが当たるんだぞ……」
時代錯誤な捨て台詞を残して遺作は去っていった。

八月一〇日、登校日のためほとんどの生徒が酷暑に耐えて学校に足を運んでいたが、教師たちの長い話が終わった途端、潮が引くように冷房の効いた自宅やモールに引き寄せられていった。

そういった人の流れから離れ、陣八は琴未を連れて校舎裏の雑木林を歩いていた。雑木林の先には、年代物の木造旧校舎がある。
旧校舎は長らく使用されておらず、荒れ放題のため立ち入り禁止になっていた。
「健太君は、旧校舎で何をするつもりなのかしら？」
「みんな集まってほしいとしか言わなかったな。内緒の企画でもあるんじゃないかな」
陣八は何度も後ろを振り返りながら、琴未の手を引いていく。
「どうかしたの？」
「い、いや足場が悪いからさ、琴未ちゃんがつまずかないかと思って」
「う、うん……」
陣八は琴未よりもそのずっと後ろを気にしていたが、彼女は怪訝な表情を浮かべただけで、深く追求はせずに黙って着いてくる。
やがて二人は、表面がボロボロになった木製の扉の前に到着した。
外見は廃墟そのものだが、見るからに重厚そうな扉だ。
「なんだか……気味が悪い……」
「大丈夫だよ。健太が先に行って、危ない場所がないか見ててくれてるはずだから」
陣八は焦った手つきで扉を開け、薄暗い屋内へと入る。
窓が全て板で塞がれているため、サウナのように蒸し暑い。

「旧校舎には鍵がかかってるって聞いてたけど……」
「僕もそう聞いてたけどさ、壊れたのかもしれないね」
陣八は緊張でかすれた声を出しながらかび臭い廊下を進み、階段を登っていく。
「あの陣八君、もう足下大丈夫だから……」
琴未は長く異性の手を握っていることに抵抗があるらしく、頬を赤らめる。
「う、うん……」
頷いているのに、陣八は手を離そうとしない。
最上階の五階まで登り切ると、陣八は階段から二つ目の教室の扉を開けて中へ入り、壁際にある電灯のスイッチを入れた。
「え……電気が通ってるの？」
蛍光灯が灯ったことに驚いた琴未が、目を丸くして部屋を見回す。
琴未は荒廃した旧校舎に電気が引かれている異常さに意識が引きつけられたようで、まるで見知った場所であるかのように迷い無くスイッチの位置に手を伸ばした陣八の不自然さには注意が向かなかったらしい。
教室には机と椅子が散乱しており、かつては滑らかであったろうフローリングの床はでこぼこになっている。窓には分厚い板が二重に打ちつけられ、一筋の光が入る隙間もない。
そのまま文化祭のお化け屋敷に使えそうな荒れ具合だ。

部屋の一角には、机や椅子や取り外された黒板などがまとめて積み重ねられ、テレビやビデオデッキまで打ち捨てられていた。
「じゃあ、ちょっとこの教室で待ってて」
「え……？」
入り口を方を振り返った琴未が目にしたのは、陣八と入れ替わるように入ってきた遺作だった。

1　どす黒いビデオテープ

夕刻、陣八は遺作に言われた通り学校へ戻ってきた。
（遺作の奴、ちょっと脅すだけだって言ってたけど……）
雑木林の軟弱な地面を早足で歩きながら、陣八の胸の内は灰色の雲で澱んでいた。
「あいつは俺に恥をかかせたから、ちょっと注意を与えるだけだ。なぁに、乱暴なことは何もしないと約束するよ」
そう言った時の、遺作の翳りのない笑みが脳裏にこびりついていた。
あれは本心から言っているか、それとも最初から守る気がないのかのどちらかだ。
一度帰宅してからも遺作の顔が頭から離れず、陣八は自室で胃の中に石を詰め込まれたような気分に耐えながら時間を潰していた。
健太に劣らないほど琴未に好意を持っている陣八は、彼女の身に何事もなかったことを祈りながらも、不安をぬぐいきれないでいた。
（琴未ちゃん、怒ってるよなぁ）
騙して連れて行った先が遺作のもとなのだから、琴未が気を害するのは当然のことと言える。
（あとで電話して謝っておかないと）

陣八は、琴未が無事でなかった時のことをあえて考えないようにしていた。
遺作が琴未によこしまな行為に及ぼうとしていたとしても、自分にはどうしようもないからだ。
陣八は正面玄関の重い扉を開け、暗い屋内へと足を踏み入れる。
左方の廊下に蛍光灯の明かりが漏れていたためそちらへ向かうと、遺作は一階の用務員室にいた。
「よう兄弟、ちょうどダビングが終わったところだ」
荒れ果てた四畳半の框に腰掛けた遺作が、陣八に笑いかけた。
押し入れの襖は破れ、狭い室内には家具は何もない。ただ旧式のテレビとやけに新しいビデオデッキがボロボロの畳の上に直に置かれ、砂嵐の画面から雑音を発していた。
「琴未ちゃんは？」
「浅川のお嬢さんならとっくに帰ったよ」
遺作は不敵な笑みを浮かべている。陣八にはその理由が分からず、不安がますます増幅されていく。
「そ、そう……」
何もしなかった？　と聞きかけて陣八は口をつぐんだ。
「なんだい、その顔は。俺があのお嬢さんを殺して埋めるとでも思ったのかい？」

「そんなことは……」
「そこまではしねぇよ。おめえじゃあるまいしよぉ」
ぎくり、と陣八は表情を凍らせ背筋を伸ばす。
「あ、あれはわざとじゃ……」
「おお、そうだった。揉み合ってるうちに転んで頭をぶつけたんだったな。じゃあ殺人じゃなくて傷害致死ってわけだ。もっとも、警察は殺人で捜査してるようだがねぇ」沈痛な面持ちの陣八とは対照的に、遺作は余裕のある態度を示している。「俺とお前は一蓮托生だ。助け合わねえとなぁ。そうだろ、兄弟？」
「わ、分かってる……」
「ふふん、それでいいんだよ。ほれ、これは分け前だ」
遺作はデッキからビデオテープを取り出し、陣八に手渡した。
「これは？」
「見れば分かるさ」
どくん、と音が聞こえるほど心臓が大きく跳ね、心拍数が上がっていく。
震える手でテープを受け取った陣八は、黒いもやのようなものが急速に体内に広がっていくのを感じていた。
「さあ今日はこれでお開きだ。俺も帰るからお前も帰りな。明日、同じ時刻にまた来るんだ。それと、そのテープは誰にも見せるんじゃねえぞ」

テレビのスイッチを切ると、遺作は陣八を半ば強引に廊下に押し出した。
雑木林を出たところで遺作と分かれ、陣八は遺作扉をくぐって校門を出た。
通学路を歩く陣八の歩みが、自然と早足になっていく。
（テープ……何のテープだ……）
嫌な予感がますます色濃くなり、テープを収めた鞄がずっしりと重く感じられる。
帰宅すると陣八はまっすぐ自室に入り、うまく言うことを聞かない指先を叱咤してビデオデッキにテープを入れた。
室外の気配を遮断しないためヘッドフォンはせず、音量を限界まで下げた。
そのような処置をしたのは、中身がどのようなものであるか、薄々分かっていたからかもしれない。
砂嵐だった画面が、やがて映像に切り替わる――。

最初に映ったのは、陣八と琴未の姿だった。
二人が旧校舎の教室に入ったシーンで、カメラは教室の奥から撮影していた。
（あ、あんな所にカメラが……）
教室の角には椅子や机がごちゃごちゃと集められていたため、そこに隠されていたのであろう。

覚えのあるシーンがしばらく続き、陣八と入れ違いで遺作がのっそりと入ってくる。
陣八の記憶に残されているのは、ここまでだ。
（あ、あのあといったい何があったんだ……）
遺作は敷居を跨いだ陣八に何か一言二言かけて追い出すと、後ろ手で扉を閉めた。
相変わらず汗臭いジャージ姿で、片手には擦り切れた旅行鞄を持っていた。
「い、遺作さん」
思わぬ来訪者に、琴未は怯えた声を出す。
「はいはい、俺は遺作さんだ」
遺作はポケットからキーを取り出し、扉に鍵をかけた。
「じ、陣八君はどこに行ったの？」
「陣八は家に帰ったよ」
「け、健太君は……どこ？」
「くっくっく、健太なんかいやしねぇよ。ここには、俺とあんたの二人きりだ」
「え……？」
遺作は扉が施錠させられたことを確認して、琴未のほうへと歩み寄る。
「どうして……鍵をかけるの？」
「これからすることを人に見られちゃ、お前だって困るだろぉ？」
「い、いやっ」

身の危険を感じた琴未が身を翻し教室の後方へ駆け寄ったため、彼女の姿が画面から消えた。おそらく、教室の後ろの出入り口から逃げようとしているのだ。
遺作はなぜか追う構えも見せず、ゆっくりとした足取りでカメラの方へ近づいてくる。遺作の薄汚いジャージが画面一杯に映り、ガタガタという音だけが聞こえてくる。
「そっちの扉は、釘で打ちつけて開かねえようにしてあるんだよ」
遺作がカメラを掴むと画面がぐるりと回転し、琴未の姿を捉える。
琴未は必死になって戸を開けようとしているが、木製の扉はがたつくどころかびくともしない。
手持ちのせいで小刻みにぶれていた映像が、突然固定された。どうやら遺作がカメラを三脚の上に据えたらしい。
ガタガタと音がしたあと、カメラの背後に回って見えなくなっていた遺作が、画面上に再び現れた。どこから持ち込んだのか、体育用のマットを引きずっている。
（ガラクタの裏にあんなものまで隠していたのか……）
獲物が逃げられないことを知っている遺作は、余裕たっぷりの所作で教室の中央に体育用のマットを敷いている。
「じ、陣八くんっ」
琴未が扉を叩き、切羽詰まった声で先程出て行ったばかりの陣八を呼んだ。
（こ、琴未ちゃん……）

自分の名前を呼ばれ、陣八は体温が上がっていくのを感じた。
「鈍い女だねえ、どうして陣八が健太がいるなんて嘘をついてあんたをここに連れてきたと思う？」
「ま、まさか……」
「陣八は俺の舎弟なんだよ」遺作はカメラの方向を調節し、琴未が画面の真ん中に映るようにした。「さあお嬢さん、こっちへおいで」
「い、いや……」
琴未は脚をがたがたと震わせ、すがるように扉にくっついていた。
「あんたは、下着を見られたなんて嘘をついて俺に恥をかかせてくれたからねぇ。お仕置きに、あんたにも恥ずかしい目にあってもらうぜ」
「ひっ……」
琴未が表情を強張らせ、身体を竦める。
「嘘つきには罰を与えないとねぇ」
「あ、あれは嘘なんかじゃ……」
「そんな部屋の隅にいても始まらねえだろぉ」これから行う行為を想像して打ち震えているのか、遺作の声は引き攣っていた。「来ないのなら、こっちから行くぞぉ」
「こ、来ないで……」
遺作は三脚ごとカメラを持ち上げ、琴未に近づいていく。

「俺の言うことを聞いたら、鍵を開けてやってもいいぞ」
「……」
琴未は閉じきられた扉に追いつめられており、それ以上後退りする事ができない。
「そこで下着を見せてみろ」
「い、いや」
「ふふん、俺に下着を見られるのがそんなに嫌なのか？」
遺作は琴未の数歩手前で三脚をおろし、ジャージの腰に挟んでいたナイフを取り出した。ぎらつく刃物の光に、琴未が息を呑む。
「お願い、お家に返して」
「家に帰る為には、俺から逃げないとなぁ」
遺作はナイフの切っ先をゆらゆらと動かして、琴未を威嚇するようにしている。
「こ、こっちに来ないでぇ」
「くっくっく、逃げないと捕まえちまうぞ」
話しながら、遺作は少しずつ間合いを詰めていく。
「だ、だめ」
「お家に帰りたいんだろぉ？」
ナイフの切っ先が一瞬下を向いたかと思うと、遺作が目にも止まらぬ早さで琴未に抱きついた。

「きゃあああっ」
「ほーら、捕まえた」
遺作は後ろから琴未に抱きつき、無理矢理カメラの方を向かせる。にやにやしながら制服の上から琴未の胸をぎゅっと握り、柔らかな感触を楽しんでいる。
「あ……あぁ」
「ずっと想像してたんだぜえ、あんたの姿を校内で見るたびによぉ、おっぱいの形はどんな感じなのかってな」
（い、遺作のヤツ、乱暴なことはしないって言ってたのに）
陣八は拳を握り締めたが、今さらどうすることもできない。ここに映っている映像は、すでに起きたことなのだ。
「い、いや……手を」
琴未の膝はがたがたと震え、今にも腰が崩れそうになっている。
「柔らかいな……おい」
遺作が無遠慮な手つきで、制服の上から琴未の乳房をまさぐる。
「マ、ママぁ」
「ちっ、こんなでかいおっぱいしておいてママかよ」
「あ……い、いや」
「おい、大人しくしてろよ」

ドスの利いた声になった遺作の手が、胸元に結ばれた赤いリボンへと伸びる。
「や、やめて、お願いぃっ」
細いリボンは遺作が指でつまんで引くだけでするするとほどけ、襟元を閉じるものは何もなくなってしまう。遺作はナイフを持った手を琴未の首に回して動きを封じ、もう片手でボタンを外して制服をはだけさせた。
「いやあっ」
「おうおう、高そうな下着だ」
胸元がルーズになった制服がずり下げられ、白いブラに包まれた琴未の片胸が露出している。琴未の下着は刺繍の入った上品なもので、誰にでも手に入りそうな製品ではない。
「な、何でも言うことをきくから」
「下着を見られただけで、俺を変態扱いするお前がか？」
「わ、私は変態扱いなんか」
「ふん、今さら遅いんだよ」
「あ……だ、だめ」
遺作は芋虫のような指をブラジャーに引っかけると、琴未の表情を楽しむかのように少しずつ持ち上げ始める。
「いやあっ、遺作さん」

「くっくっく、乳首の色は何色だ？」
「あ……」
ぶるんという感じで、下着に包まれていた肉の塊がこぼれ落ちた。
「お、おお……桜色だぁ」
遺作はにやついた顔をさらにほころばせ、琴未の肩越しに乳房の尖端を覗き込んでいる。遺作の言葉通り、豊乳の上で息づく肉の実は、欲望を持つ男なら誰でも思い描く理想を反映したような、薄い色をしていた。
「……」
琴未は言葉も出ない様子で、目に涙を浮かべて身体を震わせているだけだ。
「これがあんたの……乳首か」
「い……や」
「顔もよくて身体がこれじゃ、神様は不公平だよなぁ」
琴未は次第に荒くなる遺作の鼻息を避けるように、顔を背けている。
「まさかお前、上が桜色のぶんだけ下が真っ黒じゃねぇだろうな」
遺作はよほど自分の言った事がおかしかったのか、ひきつるような笑い声を出した。
「……」
「どおれ、俺が見てやるとするか」

琴未はようやく何をされるかわかったらしく、遺作の腕の中でもがき出した。
「て、手を離してぇっ」
「暴れると、綺麗な顔に傷がつくぜ」
遺作の手がスカートをまくり上げると、ブラジャーとお揃いのパンツが露わになった。白無地で光沢があり、上端に小さなリボンがついた落ち着いたデザインだ。
地味な下着も、琴未のような少女が履くとその奥に隠されている翳りを想像してしまうため、派手なものよりも扇情的だ。
「ほお……これがお前のパンツか……」
「いや、見ないでっ」
「外から見る分には綺麗だが、内側はどうかねえ。まさか、黄ばみで汚れてるなんてことはないだろうなあ？」
「やめてええっ」
琴未は必死にスカートの裾を下げようとするが、遺作は意に介さず手を股間へと進める。
「きゃあああっ」
「うるせえな、耳元で叫ぶんじゃねぇ」
「だ、だめよっ」
「ほらあ、腕を離すんだよっ」

琴未が必死で遺作の手首をつかむ。だが、いくら抵抗しようにも所詮男の力にかなうはずがない。遺作は構うことなく布の上から指を当て、琴未の秘所をまさぐりだす。
「触り心地の良い下着だな、シルクかぁ？」
「うっ……」
遺作の指先が柔肉の谷間に食い込み、形を確かめるように弄り続ける。
「あっ……あぅ」
「おお……」
「お、お願い……もうやめて」
「これがお前のまんこかぁ」
卑猥な言葉を聞かされたせいか、青白かった琴未の頬が朱色に染まった。
「柔らかくてぽってりしてて」
「い、いやらしい事を言わないで」
「下着の上からでもわかるぜ、形がよ」
「だ、だめ……」
「ほれ、ここが気持ちいいんだろ？」
遺作は食い込ませている指の関節を曲げ、琴未の一番敏感な部分へ指先を立てる。
「あっ……くぅ」
「どうなんだよ、おい」

クロッチの継ぎ目あたりに指を立て、重点的にマッサージしていく。
「くくく、なんだか硬くなってきたぞ」
「うぅ……んん」
慣れた手つきで、遺作は自己主張しだした女芯を布越しに挑発する。
「う……んぅ」
生まれて初めてされる行為に、琴未は感じるという感覚すら理解してない。
「こんなのはどうだあ？」
遺作は下着の布を中央へ寄せ、ふんどしのようにT字状にしてしまう。
「あっ、いやっ」
「くっくっく、陰毛がはみ出てるぜ」
「いやあっ」
琴未が顔を真っ赤にして悲鳴を上げる。確かにふんどし状になった布の脇から、わずかに柔毛が覗いていた。
（あ……琴未ちゃんの……）
自分がしでかしてしまった結果の重大さに苛まれながらも、陣八は憧れの女性の隠されいてた部分を目にして、ごくりと唾を飲み込んだ。
「これで……こうするんだ」
遺作は手首を動かし、寄せた布を小刻みに持ち上げる。自然、布の内側と琴未の敏

感な部分が擦れ、琴未に初めての性の感覚を呼び起こしていく。
「あぅ……くぅ……」
「どうだあ、感じるか？」
「うう……あぁぅ」
「くっくっく、もっと強い刺激じゃねぇとわからないんだな」
そう言うと遺作は琴未に手首を掴まれたまま、いとも簡単に下着の内側へ手を滑り込ませた。
「きゃあああああ」
空気を切り裂くように悲鳴が、蒸し暑い空気を震わせる。
「ほら、ここだよここ」
白い下着の内側で遺作の掌がもぞもぞとうごめいている。
「だ、誰か助けて」
腰の辺りまで響く不思議な感覚から、琴未は身体をよじらせ逃げようとしていた。
「座った方がいいのかあ？」
腰を引いて逃げようとする琴未の動きを勝手に解釈した遺作は、カメラの三脚を片手に琴未を体育用マットの上まで引きずり、彼女と一緒に座り込んだ。
背面座位の体勢だったが、座ったせいで琴未は膝をぴっちりと閉じることができるようになり、遺作の手の動きを阻んでいた。

「こら、足を開くんだ」
「うっ……うぅ」
「逆らうと顔に傷がつくぜっ」
遺作の大声に全身をびくりと震わし、琴未は蝋人形のごとく身体を固まらせる。それを見た遺作が琴未の膝を手で開いたが、もう琴未は元に戻そうとはしなかった。
「よしよし……それでいい」
遺作はカメラの角度を調節し、琴未の全身が映るようにする。
M字開脚で背後から抱きすくめられ、股間に手を入れられている琴未は、目に涙を溜め頬を引き攣らせている。
琴未が自分の思い通りになると確信したのか、遺作はさらに激しく彼女の股間を弄び始めた。
「ぐっ……うう」
「た、たまんねぇぞ」
遺作は自分の欲望を押さえきれなくなったのか、琴未自信すら触れた事のない肉壷の奥へ指を埋没させる。
「いっ……痛い」
「やっぱり処女か。まあ浅川のお嬢さんが非処女だったら、俺はショックで卒倒しちまうがね」自分で吐いた言葉がよほどおかしいのか、遺作は肩を揺らして笑う。「そ

れにしても……くぅ……す、吸いつくような柔肉だ」
遺作の指の動きに合わせて、たわわに揺れる乳房がもの悲しい。
「下の毛は……あまり生えてないようだな」
「い、いやあっ」
「こればかりは直接確かめてみるまで分からねえ。かわいい顔して、下は剛毛ってこともあるからよお」欲望で顔をほころばせた遺作が掌全体で陰阜を撫で回し、若草の繁り具合を確かめる。「お嬢さんのここは結構なモリマンだな……くく、経験はないくせに身体だけは発達してるようじゃねえか」
「て、手を放して……お願い」
「くっくっく、俺はお前を悦ばせようとしてるんだぜ」
琴未の哀願などには聞く耳を持たず、遺作は下着の中に入れた手をうごめかせ続ける。
「んん？　これはなんだあ？」
琴未の身体に何かが起きているらしく、秘口の入り口付近を往来していた遺作が、指の動きを速める。
「あっ……いやっ……」
「くっくっく、濡れてきてるじゃないか」
遺作が下着の中から手を出すと指先は透明な粘液が付着しており、二本の指の間に

糸を引いていた。遺作がやや深く指を進めた拍子に、内部に溜まっていた恥ずかしい粘液がこぼれ落ちたらしい。
「どうなんだ？　気持ちいいんだろ？」
「ふぅ……くぅ……」
初めて覚える感覚のため、琴未はそれがどういう種類の感覚なのか分からないのだ。戸惑う琴未を弄ぶ遺作は、再び下着の中に手を入れ蠢かせる。映像では布の下でもぞもぞと指が動いているだけだが、どうやら肉芽を包皮の上から二本の指で挟み、その指先を秘口付近で遊ばせるているようだった。琴未が痛みを訴えていないことから、男を拒む門の奥には入ろうとせず、浅瀬で指を回し、奥から漏れ出てくる蜜を絡ませているようだ。
「どうだあ、いいんだろう？」
「手を……放して……」
そう言っているものの、遺作の腕を掴む琴未の抵抗は心なしか弱まっていた。
「お前の奥からどんどん溢れてくるこの体液がなんだか分かるか？　これは愛液っていう、男を呼び込むための淫らな粘液なんだぞ」
「いやっ、うそっ」
「嘘じゃねえよ。お前の身体は男を欲しがってるのさ。まあ無理もねえぜ、俺のテクで弄られたらどんな女だってとろけるからな」

言いながら、遺作は下着の内側で激しく指を使う。
「はぁ……うぅ……」
「この様子じゃ、どうせ自分で弄ったこともないんだろ」
琴未の、誰も立ち入ったことのない部分から滲み出してくる粘液を指先につけ、秘唇の上端の小さな粒に塗りつけていく。
「くぅ……あぅ……」
「どうなんだ？　ここを弄って気持ちよくなったことはあるか？」
「あ、ありませんっ」
「セックスも自慰もまだか。いいねえ……そういう女を調教するのが一番いい」
琴未の初めてを指で奪う気は気はないらしく、遺作は入り口付近のみを弄り、無理矢理押し入ろうとはしない。きつく閉じられた処女の扉を指先で軽くノックし、粘液が付着するとそれを上部の宝石に塗りつけていく。
「んぅ……ん……」
「ほれ、膝が閉じてきてるぞ」
敏感な場所を弄り回されることに耐えられず徐々に閉じてきていた琴未の脚を、遺作は再び大きく開かせる。
「ああ……いやぁ……」
「パンツを見られるぐらい、なんてことはないだろう？　大事ななのはパンツの下に

あるんだからよぉ」
遺作は興味津々といった目付きで、琴未の肩越しに股間へ視線を集中させる。遺作がパンツの中に手を入れて動かしているせいで、手や下着の陰から、ちらちらと陰毛が見え隠れしていた。
「み、見ないでぇ……」
「お嬢さんのあそこはどんなふうになってるんだろねえ。見せてほしいんだが、いいよな？」
「だ、だめっ」
「これからたっぷりと悦ばせてやるんだ、ちょっとくらいいいだろ」
笑い声を抑えきれない遺作が手の甲で下着を押しのけると、頂上辺りにちょこんと柔毛が乗った丘に光が当たる。
「きゃあああっ」
「ほお、こんなふうになってるのか」
「いやあああっ」
「いい匂いだ」
遺作は誰も見たことのない琴未の股間を、まじまじと凝視する。
布と肉の内側に閉じこめられていた女の匂いが開放されたようで、鼻腔の奥まで空気を吸い込んだ遺作が頬をひくつかせていた。

「カメラの前の奴らにも見せてやったらどうだ？」
「い、いや……それはだめ……絶対……」
「じゃあ一度、このままイカせてやるよ」
「……」
イクという動詞が理解できないらしく、琴未は戸惑った様子で視線を泳がせている。
「イクってのは、性的に最高に気持ちよくなることだよ。もしお前がスケベな女だったら、ここを弄ってるだけでエクスタシーに達するはずだ。そしたら、お礼にお前のあそこを見せてもらうからな」
「や……いや……だめ……」
「見せたくないんだったら、我慢すればいいんだよ。そのかわり我慢できなかったら、カメラの前でパンツを脱いで恥ずかしいところを全部見せるんだ、いいな」
「そんな……できない……」
「我が儘を言うんだったら、今すぐにパンツを切り裂いちゃうぞ」遺作は下着のゴムを引っ張っては放す。「気持ちよくなったらパンツを脱ぐな？」
「は……はい……」
「くっくっく、それでいいんだ」
醜悪な笑みで顔を歪ませて、遺作は指の責めを再開する。
（そ、そんな……）

陣八は喉がカラカラになっていた。怒りを覚えるべき映像のはずなのに、股間は痛いほど勃起している。
「あうぅぅ……」
「ほれ、ここがいいんだろう？　ぬるぬるだぞう」
「いや……なに……これ……」
琴未が不安げな声を漏らす。今までは秘口と秘芯の交互の責めだったが、遺作は親指も使い、両方を同時に弄り始めたのだ。蜜壺の入り口のぬかるみで指を回しながら、親指で包皮の上から肉芽を入念にマッサージしていく。
「もっと弄ってほしいんだろ？　もっと奥に欲しいし、もっと太いモノを入れてもらいたいんじゃないのかあ？」
「ち、違うっ……」
何もかも初めての琴未には抵抗する知識もなく、腰の辺りから発生する抗いがたい感覚に、もじもじとお尻を動かしている。
ちゅ……ちゅ……と粘っこい音が処女の股間から漏れ出る。
「ほれ、クリトリスがこんなに大きくなってきたぞ」
琴未の下着の中に手を入れた遺作がもぞもぞと指を動かしているが、薄い布に遮られて外からは窺い知れない。
「そ、そこを触らないでっ」

琴未は遺作の手を振り払おうとするが、まるで力が入っていない。無理矢理高ぶらされた性感のせいで身体が火照っているらしく、額にじっとりと汗が滲み出ていた。
「いやっ……いやっ……何か……来るっ……」
「それがイクってことだよ」遺作の指の動きが激しくなり、それに比例して粘液の音も大きく連続的になっていく。「そのまま俺に身を任せてみろ」
「あっ……やっ……」
「イキそうんだな？」
「ち……がう……」
トドメを刺そうと、遺作は掌全体で陰核を押し潰しながら擦りたて、指で秘口を弄り回す。
「イッたら、ちゃんとカメラの前でパンツを脱ぐんだぞ」
「やあっ……許してっ」
「ほれ、イッちまえっ」
遺作が激しく手首を震わせた瞬間、琴未が顔を仰け反らせた。
「やっ……いや……ぁあああああああっ」
琴未は身体をがくがくと震わせ、生まれて初めてのエクスタシーに達する。膝が閉じられ、遺作の指から逃れようとお尻を引こうとする。
「おおっ、指が吸い込まれるっ」

画面から直接は見えないが、女体の生理で琴未の秘口がパクパクと開閉し、指に食いついて奥へ引き込もうとしているらしい。恥ずかしい粘液が淫らな匂いと共にどっと溢れていることは間違いなく、それが遺作の指の動きを助けてしまう。

「どうだねお嬢さん、これがイクってことだ」

琴未が強烈な快感に打ち拉がれている最中にもかかわらず、遺作は指を止めず、さらに上へと押し上げていく。

「ぁああぁっ……くぅうううっ」

「くくく……おまんこが男欲しさにひくひくしてるぞ」

「あうぅうう……ああ……」

琴未は体中が敏感になり甘い痺れで動けなくなっているというのに、遺作は彼女の股間を手放そうとせず、ゆっくりとした指使いで膣肉の感触を楽しんでいた。

2　喜悦の刻印

クーラーを効かせているにもかかわらず、陣八のシャツはぐっしょりと汗で濡れていた。

テレビ画面の中では、あってはならない交わりが繰り広げられている。

（ど、どうしてこんなことに……）

発狂しそうな罪悪感と情欲とかが脳内に同居し、陣八は目眩を覚えていた。

ボリュームを絞られた音声がやけに遠くに聞こえ、全てが悪い夢であればと、誰にというわけでもなく懇願していた。

思いを寄せている女の子がこんな目に遭っていれば悲憤するのが当然なのだが、陣八の下半身は正直に反応しており、男の部分がズボンの中で興奮しきっている。

（なんでこんなビデオで勃ってるんだよ……）

自己嫌悪に襲われながらも、陣八は画面に釘付けになった視線を逸らすことができずにいた。

夏の暑さに加えて人の肉体から溢れ出す熱気が籠もった教室内で、琴未の撮影は続いていた。

琴未を初めての絶頂へと導いた遺作は、虚脱した彼女を後ろから抱きすくたまま座

り、カメラに正対している。琴未の首に片腕を絡め、もう片手で今度はしこり始めた乳首を弄っていた。
「どうだお嬢さん、これがイクってことだよ」
「い、いや……」
「あんなに身体をビクビク震わせて、気持ちよかったんだろ？」
琴未の艶姿に興奮しきった遺作が息を荒げている。汗臭い身体から男の体臭を発散させているらしく、琴未は少しでも身体を離したがっている。
「ち、違う……」
初心な琴未は自分の身体に起きた変化を理解できず、戸惑った様子で視線をカメラから反らしていた。半分脱げかけた制服のシャツが、汗で肌に張り付いている。
「じゃあ、どうしてあんなにおまんこがパクパク締まったんだ？　それに、乳首も立ってるじゃねえか。正直に認めないのなら、何回でも同じ目に遭わせちゃうぞ」
「や……いやぁ……もう許して……」
乏しい知識ながらも、されてはならない行為であるということは分かるらしく、琴未は瞳を潤ませて懇願する。
「どうなんだ、答えてみろ。気持ちよくなったな？」
「は……はい……」
「ようし、じゃあ約束通りパンツを脱いでもらおうか」

待ちきれないといった表情で、遺作が囁く。
（こいつっ……）
怒りと別の興奮がない交ぜになり、陣八は腰を浮かしかけた。
「い、いやっ、それはいやぁっ」
遺作の言葉を聞いた途端、真っ青になった琴未が逃げだそうと暴れ出した。
「なんだとぉ、気持ちよくなったらパンツを脱ぐ約束だろうが。約束を守らねえってのか」
「何でもするから、それだけは許してっ」
「暴れると怪我をするだけだぜ」
いくらもがいても、琴未の細腕では遺作の怪力にはかなわない。目の前にナイフをちらつかせられると、恐怖で動けなくなってしまう。
「お前のように嘘つきな生徒にはお仕置きが必要だ。以前も、俺に下着を見られたとか嘘をついて恥をかかせたてくれたしな」
「あれは嘘なんかじゃ……」
「そうやって清純なふりをして、大人たちを騙してきたんだな……。だが俺は騙されんぞ、たっぷりと罰を与えてやる」遺作は一瞬怒気を孕んだ顔を見せると、琴未を突き飛ばす。「さあ、四つん這いになってケツを突き出すんだ」
「やああっ、いやぁ……」

琴未は何とか抗おうとするが、強引に遺作の命ずる犬の体勢を取らされてしまう。
「もっとケツを高く上げなっ」
「うう……うぅぁ」
「もっとだよ、もっと高くケツを上げるんだ」
「う……」
遺作はより高くお尻を持ち上げることを要求し、琴未は背筋をしならせマットに額がつくほど顔を下げて、臀部を突き出す卑猥な姿勢を取らされる。
「あぁ……恥ずかしい」
「よーし、それでいい。だが、スカートはいらねえ」
お尻を突き出す琴未の腰に素早く遺作の手が伸び、琴未が気付いたときには足下にスカートが落ちていた。琴未の下半身は下着だけとなり、贅肉のついていない太股が露わになり、丸いお尻の形までもが確認できる。
「あっ、いやっ」
「動くんじゃねえっ」
琴未がスカートを戻そうと体勢を崩しかけたとき、遺作の手が振り下ろされ、彼女のお尻が弾けた。
「きゃあっ」
パァン――と小気味いい音がスピーカーから発せられる。

「俺がいいって言うまで、その体勢でいるんだ」
遺作のドスの利いた声と臀部に加えられた強い力で、琴未は身体を硬直させてしまう。
「くくく、そうやって大人しくしてるんだ」遺作はカメラの三脚を引き寄せ、二人の近くに据える。「お前が約束を守らないのが悪いんだからな」
「う……うぅ……」
「パンツが丸見えだ……」
遺作が嫌らしい目付きで、舐めるように琴未の下半身を眺める。
「い……いや……」
「じっとしてろよ」
琴未の傍らで膝立ちになると、遺作は琴未の下着に指をかけTバックのように食い込ませてしまう。
「あっ、いやっ――」
琴未の白い臀部が、横からの視点で画面に大写しになっていた。陣八は胃が収縮するのを感じながら、映像を凝視し続けていた。
（琴未ちゃんのお尻だ……）
熱くなった股間が早く外に出せと訴えているが、陣八はベルトを緩める余裕すらなく、画面に見入っている。

「動くと、またケツをひっぱたくぞ」自分の方を振り返った琴未を牽制しておいて、遺作は半分露出した臀部を撫で始める。「ほお……張りがあるわりに、マシュマロみたいに柔らかい尻じゃねえか。大きさは……中くらいだな。身長からすれば平均的だ。この前の奴は運動部だから引き締まってたが、お前のは余計な筋肉が付いてないぶん柔らかいな。肌もきめ細かくて綺麗だし、極上の美尻だぞ」

「触らないで……お願い……」

不潔な手で撫で回されるおぞましい感触に総毛立ちながら、琴未は身体を小刻みに震わせている。

「パンツを脱ぐ気になったか」

「い……いや……できない……」

その気になれば無理矢理剥ぎ取ることができるくせに、遺作はわざと琴未自信にやらせようとする。

「まさかお前、お仕置きしてほしくて、わざと拒んでるんじゃないだろうな？」

遺作はお尻の谷間に食い込ませた下着を引っ張り、琴未の股間に微妙な刺激を与えている。

「そ、そんなことないっ」

「くっくっく、それじゃあ遠慮無くお仕置きしてやろう」

言うなり遺作は手を振り上げ、突き出された琴未のお尻めがけて勢いよく振り下ろ

した。
パァン――
「きゃあああっ」
「いい感触の尻だぜ。どうだ、パンツを脱ぐか？」
「い……いや……」
「そうかい、そんなに好きなら、たっぷり叩いてやるよ」
パァン――パァン――パァン――パァン――
「くぅ……うぅ……」
遺作は下着をTバック状にし、肌を露出させて叩いているため、布地がますます股間に食い込んでいく。尻肉が弾けるたびに、重い衝撃は琴未の子宮にまで到達していることだろう。
「くく、いい光景だねえ。学園のアイドルが、俺の前でケツを突き出して叩かれるのを待ってるんだからな」
「ま、待ってなんか……」
パァン――パァン――パァン――パァン――
「ほうれ、パンツを脱ぐ決心はついたか？」
雪のように白かった琴未のお尻が、赤く染まってきていた。
「た、助けて……」

「お前がそこまで強情になるのなら、俺にも考えがあるぞ」言葉こそ威嚇的だが、遺作は欲望で破顔しそうになっているのを、必死で抑えている。「ほら、カメラに向かって尻を突き出すんだ」

「あぁ……あ……」

遺作は真正面からお尻の谷間が映るように、琴未に向きを変えさせる。そして被写体が陰にならないように、琴未の斜め後ろで膝立ちになった。どのようなどす黒い欲望をみなぎらせているのか、遺作の目は危険な光りで輝いている。

「な、何をするの……」

不安げに振り向く琴未を見返しながら、遺作がパンツの両端をつまむ。

「ふふん、自分で脱げないのなら俺が脱がしてやるよ」

「い、いやっ」

琴未は反射的に下着へ手を伸ばし、脱がされることを防御する。

「手を放すんだよ、お嬢さん。でないと、ナイフで制服を切り裂いちゃうぞ。そしたらお前は帰るとき全裸になるんだ。それでもいいのか？」

「うっ……うぅぅ……」

琴未の、指の力が弱まるのを見計らって、遺作がゆっくりとパンツを剥いていく。

（あ……）

いよいよ琴未の秘められた部分が露わになるかと思うと、陣八は呼吸が苦しくなっ

てきた。
お尻の割れ目に食い込んでいるために、下着の上端がまず太股を下りていき、クロッチ部分が最後まで秘部に接触していた。裏返しになった下着が、ほぼ臀部から脱げかかったとき、遺作が奇妙な声をあげた。
「おやあ、なんかくっついてるようだぞ」遺作が意地悪な笑みを浮かべて、琴未にも注目するように促す。「見てみろよ、これはなんだ?」
お尻を高く上げ顔を床近くまで下げた琴未は、自分の脚の間から、股間が裸にされる様子を見て取ることができた。
「や……なに……」
下着のクロッチ部と琴未の秘所が、なぜか接着剤でくっつけたように不自然に繋がっている。
「どうしてこんなになってるんだろうねえ。まあ、脱がしてみれば分かるけどよお」
「い、いやっ」
パンツの両端をつまんだ遺作が、にやついた顔でゆっくりと下着を引き下ろしていく。
秘部と下着の間に、とろり、と粘液の橋が架かった。
「いやあっ、恥ずかしいっ」
「指マンされたときの愛液かぁ? それとも、まさか尻を叩かれて濡らしたんじゃな

いだろうなあ」
「やあっ、み……見ないでっ」
「濡れた下着をか？　それとも……丸出しになったここをか？」
「いやああっ」
「どんなにかわいくても、ここだけは見た感じ変わらないんだよな」
「……」
あまりのショックに、琴未は悲鳴すら上げる事ができない。
「くっくっく、ケツの穴まで見えてやがる」
「あ……あ……あぁ」
遺作の言う通り、琴未の秘められた部分が全て露わになっていた。
肌色とはあきらかに違う肉丘の間から、さらに鮮やかな色をした肉芽が覗いている。散々遺作に弄られたにもかかわらず秘唇はほとんど開いておらず、ピンク色の内部をわずかに覗かせているだけだ。秘裂の上部では、周囲と大して色の違わない肉皺がキュッとすぼまっている。琴未の菊座は皺が少なく平坦で、縦線が一本走っているだけのようにも見えた。陰毛は柔らかい毛質のものが恥丘に狭い範囲でしがみついているだけで、性器の横や肛門の周囲にはまったく存在していない。
（これが琴未ちゃんの……）
陣八は撮影者が遺作であることを一瞬忘れて、憧れの女の子の秘部を余すことなく

確認してしまう。
「ほら、ケツが下がってきたぞ」
遺作は琴未の臀部を両手で撫でながら、次第に指先を肉に谷間へと近づける。
「あっ……な、何をするの」
「何をするかだって？　お嬢さんのおまんこを広げて、奥まで観賞させてもらうんだよ。いいよな？」
遺作は息がかかるほど顔を近づけ、陰裂の両端に指をかける。
「だ、だめ……絶対に」
「学園のアイドルの性器がどんなふうになってるか、みんな知りたがってるぜ。みんなにも見せてやれよ」
琴未の視線が一瞬カメラの方を向く。
「いやあっ」
「今まで性器の内部まで見せた相手はいないんだろ？　くっくっく、お前のここを見るのは誰だろうな？　多分一人じゃねえぜ。何人もがお前のおまんこの中の様子を見るんだ」
「いや……いや……いやぁっ」
「ほうれ、みんなに見てもらえ」
そう言いながら遺作は、無造作に琴未の肉ひだを大きく広げた。

「いやあっ、は、恥ずかしいっ」
「これくらいで恥ずかしがってもらっちゃ困るぜ。これから、もっと恥ずかしい目にあってもらうんだからな」
「い……やぁ」
琴未の身体から力が抜けていくのが、外部からでもはっきりと見て取れる。
いつもなら何重にも隠され、例え裸になったとしても脚の間で見えない場所が、今は遺作の指によって大きく割り広げられていた。唇にも似た色の粘膜がてらてらと光っており、その奥にある複雑な形の窪みまでもはっきりと見えている。性器が横に広げられているせいで秘芯は包皮から飛び出し、薄い色の姿を外気に晒していた。
（ぜ、全部見えちゃってる……）
余りに直接的な映像に陣八は混乱し、思わず口元を抑える。
「これが……お前の処女膜か」見惚れたように、遺作が溜息をつく。「まっサラのピンク色じゃねえか……。おまけにもうぬるぬるになってるしよぉ。いいか、ここに俺のちんちんが入るんだ」
「い、いや……よ」
「ここだけじゃねえぞ、こっちも……」
遺作は陰唇をめくっていた指を上に滑らせ、尻肉を目一杯広げる。
「いやあっ、どこを見てるのっ」

「分かるだろう？　ケツの穴だよ。セックスはこっちでも楽しめるんだ。今日はそれを、たっぷりと教えてやるよ」
「へ、変態……」
おそらく琴未自身ですらじっくりとは見たことがない不浄の門を、遺作は目を皿のようにして視姦する。
「綺麗な顔をしてても、ここから出すモノは同じだからよぉ、しっかり洗ってあるか調べてやるよ」
「いや……いやあっ」
「これが……お前の肛門か」遺作は内部が露わになるほど強く広げ、琴未のアヌスを目に焼き付けていく。「丸見えだ……尻の穴の皺の数まで数えることができるぞ」
「ああ……あぁ……」
「まさか、性器を弄ってない分、こっちを自分で弄ってるってことはないだろうな」
琴未に恋人ができたとしてもおそらく触らせないであろう場所を、遺作は無遠慮に人差し指で上下に擦る。
屈辱的な場所に触れられた琴未は雷に打たれたように息を呑み、尻肉を締めて抵抗する。だが所詮お尻を突き出した姿勢では隠しきることはできず、遺作にされるがままになってしまう。
「すべすべしてるぜ……色は薄いし、柔らい肛門じゃねえか。それに……臭いもほと

んどしねえ」
遺作はアヌスに鼻を近づけ、臭いをかぎ出す。
「……」
アブノーマルな遺作の行為に、琴未は声を出すことすらできずにいる。
「お前のこの姿を忘れない為にも、ちゃんと録画しておかないとなぁ」
遺作はカメラを引き寄せ、琴未の股間を中心にアップにする。
「い、いやっ」
「白く透き通るような肌も豊かな乳房も、そして桜色をしたまんこも、薄い色の肛門も、全て映しておいてやるぞ」
「う……う……うぅ……」
遺作はカメラを意識しながら琴未の肉を大きく広げ、鮮やかな色に濡れ光る秘唇や処女膜、恥辱にひくつくアヌスまでも、余すことなく機械に記録していく。
「どうだぁ、そろそろ俺とセックスしたくなったか？」
奥まで映るように肉襞を広げる遺作は、獣欲で目をぎらつかせていた。
「だ、誰が……」
「そうかい、それじゃあしたくなるように可愛がってやるよ」
遺作はカメラの位置を斜めに直すと、おもむろに琴未のアヌスにしゃぶりついた。
「い……い……いやああっ」

「大人しくしてろっ」
身体を前に逃がそうとする琴未のお尻を、遺作がひっぱたく。
「いやっ、いやあっ」
「尻を逃がすんじゃねえよ、こっちに押しつけるんだ。言う通りにしないと、制服を全部切り裂いて全裸で校内に放置するぞ」
遺作ならその程度はやりかねなかった。完全に優位な立場から出される脅迫に、琴未は否応なく服従せざるを得ない。
「うう……うぁ……」
「そうだ、それでいいんだよ」
遺作が再びお尻に顔を挟み、琴未の排泄器官を舐めしゃぶる。下から上におおざっぱに舐め上げ、アヌスが唾液で光り出すと、今度は舌先で皺の一つ一つをなぞり、唾液をまぶしていく。くすぐるようなタッチで、遺作の外見からは想像できないほど丁寧に舌を使い、固く絞られた菊座をほぐしていく。
「はあ……はあ……うぅ……」
「くく、尻の穴を舐められて感じてるのか？」
息を荒くしかけている琴未に、遺作がにやつく。
「ち、違うっ」
「どっちにしろ、そうなるんだぜ」

遺作は秘裂をまさぐり中指に恥蜜を掬い取ると、唾液が溜まった肉皺の中心に押し当てる。
「な、何をするの……」
「こうするんだよ」
遺作が指に力を込める。
「ああっ、いやっ、やめてっ」
「しっかり締めてろよ。抵抗をぶち破って入れるのが醍醐味なんだからな」
侵入を防ごうと琴未は必死で扉を閉じるが、先程の舌責めの影響で彼女の菊門はわずかにほぐれていた。
――ずぷぷぷぷっ
きつく閉じられたアヌスが、節くれ立った指を飲み込んでいく。
「ああああああっ」
「ほうら、入ったぞぉ。どこまで入るかな？」
「いやっ、もう入らないっ」
琴未の言葉と裏腹に、ずぷずぷと遺作の指が入っていく。
「くっくっく、ちゃんと根本まで入ったじゃねえか」
歓喜で顔を歪めた遺作が、手首を回し肛内を探っていく。
「ああっ……あぁ……」

「熱くて……ぬるぬるしてるぜ、お前のケツはよぉ」
「うぅ……う……」
内壁を撫で回される嫌悪感から逃れようと琴未はお尻をよじらせているが、無論そんなことで指は抜けはしない。
「締まりがいいわりに、柔らかいじゃねえか。まさかお前、ケツの穴でオナニーしてたってことはないよな？」
「……」
「どうなんだよ、おい」
遺作が挿入した指をぐりぐりと回し、答えを迫る。
「しっ、してませんっ」
「じゃあ、何もしないでこの柔らかさってわけだ。これならちょいとほぐしただけで、すぐに俺のちんちんも受け入れることができるだろうよ」
「い、いやああっ」
「くっくっく、昨日までは処女だったのに、今日はアナルセックスまで体験することになるんだぜ。一気に堕としてやるよ」
「いや……いや……」
琴未は、遺作が発する倒錯したプレイの予告に、愕然とした様子で目を見開く。
（そ、そんなことまでするのか……？）

陣八の中で、変態的な行為を受けている琴未を救い出したいという気持ちと、先を見てみたいという欲望が抱き合うように渦巻いている。
「女の悦びを教えてやろうってんだ。感謝されてもいいくらいなんだぜ」
遺作は首をすくめて肉壺の入り口を覗き込むと、菊座に挿入した指を膣側に折り曲げる。
「あっ、いやっ……」
純潔を示す膜の奥から、琴未が必死になって流れ出すのをこらえていた粘っこい液体が押し出され、滴になって秘口からこぼれ落ちる。
「これはなんだね、お嬢さん」遺作は笑い出すのを抑えきれない様子で、喉を鳴らす。
「まさか早くちんぽを入れてほしくて、期待してたんじゃないだろうね」
「は、恥ずかしい……」
遺作がねちねちといやらしく、琴未の肛門を弄んでいる。埋め込んだ指を回転させるだけでなく、今度は前後の抽送を加え始めた。
「い、いやっ、動かさないでっ」
「そんなこと言いながら、本当は悦んでるんだろう？　ケツを弄るたびに、まんこが物欲しそうにひくひくしてるぞ」
「いやあああっ」
腸液に濡れた遺作の指が、アヌスに出たり入ったりを繰り返す。

「俺に恥をかかせて後悔してるな？」
「……」
「お前があんな目で俺を見なけりゃ、下着を見せるだけで済んだんだぜ」
「指を……抜いてください」
「ほれ、俺に謝ってみろ」
遺作が舌を長く伸ばし、菊門と指の結合部をちろちろと舐め出す。
「はあぁうっ……お、お願い……もう許して」
「許して……じゃないだろ？」
遺作のごつごつとした指が、琴未のアヌスをぐりぐりとえぐる。
「ご、ごめんなさい」
「よーし、今度はおまんこを舐めてくださいと言え」
「……」
「言わねぇと、ケツの穴に拳を突っ込んでやるぞ」
遺作が乱暴に指をピストンさせる。
「い、痛いっ」
「さあ、言うんだよ」
「お……お……おまんこを……舐めて……」
「くっくっく、この淫売女め」

琴未のような少女にはおよそふさわしくない卑猥な言葉を口にしてしまい、彼女は顔を真っ赤に染めている。
遺作は肛門から指を引き抜くと、蜜を湛えている秘裂に指を添え、大きく横に広げた。鮮やかな色の粘膜が露わになり、窪みに溜まっていた淫液がとろりと流れ出し、尿口から陰核にまでしたたり落ちる。
「ああっ、いやあああっ」
「綺麗なピンク色じゃねえか。ここに俺のちんちんが入るんだぞぉ」
「い、いや……やめて……」
「楽しみにしてろよ、奥を突きまくってやるからな……。初体験が俺のちんぽだと、他の男じゃ満足できない身体になっちまうだろうけどよぉ」
「やめてぇっ、ここから出してええええっ」
これから起きるであろうおぞましい出来事に琴未は泣き叫ぶが、もちろん助けが来るはずもない。
「まずは愛液の味見からだ」
「い、いやあああっ」
遺作が桜色の粘膜に口を付け、くちゅくちゅと音を立てながら、琴未の恥ずかしい粘液をすすり出す。
まず陰核の莢に溜まった滴を舐め取ると、舌先を押しつけ、フードから小さなクリ

トリスを露出させる。そして薄い色の肉芽に舌を絡め、唾液と淫液の混合液を塗りたくっていく。直接の刺激で立ち上がり始めた秘芯を、舌を踊らせて左右に叩くように嬲り、琴未の股間に甘い痺れを送り込んでいった。

「スケベな女だぜ、もうクリトリスが硬くなってきやがった」

「あああ……ああぅぅ……」

お尻を突き出す姿勢で性器を広げられ、琴未はこれ以上ない無防備に姿になっている。遺作はできるだけピンクの粘膜が見えるように秘裂を大きく広げると、お尻の谷間に顔を埋め、舌先で処女の扉をノックする。

「ほれ、もっと愛液を出してみろよ」

遺作が唇を丸め、強く吸い上げる。

「ああっ、いっ、いやあああっ」

扉の内側から溢れる蜜が、ずちゅぅという音とともにどんどんと吸い出されていく。

遺作は股間を舐めしゃぶりながらも他方への責めも忘れず、指で虐めたばかりのアヌスを、親指で撫で回している。

「ああ……もういやぁ……」

陰部に執拗な責めを受ける琴未が、涙声でもじもじとお尻を振り出す。苦痛から生まれた動きとは明らかに違う、淫靡な動きだ。

「なんだあ、もうイクのか？」

遺作が目の前のアヌスを指でもみほぐしながら、嘲笑する。
「いやっ……いやっ」
「くっくっく、自分だけ気持ちよくなるのはずるいぞ。お前が満足したら、俺のも舐めてくれるな」
「……え……？」
琴未は何を要求されているのか、理解できていない。
「フェラチオだよ。お前がイッたら、俺のちんちんを舐めてもらうからな」
「い、いやあああっ、そんなことできないっ」
そのような性行為があることも知らなかった琴未は事態を理解した瞬間、反射的に逃れようと身体を起こしたが、すぐに遺作にほこり臭いマットへ押しつけられてしまう。
「くくく、なあに、フェラチオが嫌なら、イカなきゃいいんだよ。我慢してればな。お前が淫らな女じゃないのなら、できるはずだぜぇ」
琴未の股間から漂う女の匂いを肺一杯に吸い込みながら、遺作は舌責めを再開する。
「ああぅ……はあ……はあ……」
スカートと下着を剥ぎ取られ下半身は丸裸の琴未が床に伏せてお尻を突き出し、そこに遺作が顔を埋めている。琴未と遺作が触れ合っている場所からはにちゃにちゃと粘っこい水音が鳴り、遺作の舌がダイナミックに動くたびに、頬を染めた琴未が歯を

食いしばる。
　自分で慰めることすらしたことのなかった琴未は百戦錬磨の遺作に執拗に責められ、すでに我慢は限界に達しているようだった。乳首や陰核は硬く勃起し、膣口やアヌスはひくつき、股間と子宮から発生する感覚が全身を浸している。
「はあ……はあっ……はあっ……」
「そろそろ、我慢できなくなってきたようだな。イクときにはちゃんと『遺作さんのおちんちん舐めたいっ、イクッ』って言うんだぞ」
「いやあっ、そんなこと言えないっ」
「言うんだよ。じゃないと、浣腸しちゃうからな」
　遺作は親指の先を肛門に立て、挿入する気配を見せる。
「はあっ、いやっ……いやっ……」
　琴未は慌てて菊座を締めるが、その拍子に湛えていた愛液をまた溢れさせてしまう。
（まさか、琴未ちゃん……）
　遺作の舌で琴未が達しかけていることが信じられず、陣八は膝を握り締めた。
「イカせてやるよ、お嬢さん」
「あっ、いやっ……」
　遺作は一気に動きを速め、琴未を追い詰める。
　親指の腹で莢の上から秘芯を押し潰し、もう一方の親指は肉皺の表面を激しく擦り

立てる。舌を突き出して秘壺の入り口を舐め回し、恥ずかしい蜜を吸い出す。
「やああっ、もうダメぇっ」
「イクんだな？」
「いやあああああああああああっ」
その瞬間、琴未はヨガのポーズのように背を反らすとお尻を突き出し、身体を硬直させた。
秘口がきゅうきゅうと開閉し、遺作の舌を締め上げる。膣肉がうごめき、どっと愛液が押し出される。指で撫で回されるアヌスも勢いよく締まり、尻肉と同調して遺作の指と顔を挟み上げる。
「ほれっ、『遺作さんのおちんちん舐めたいっ、イクッ』はどうしたっ」
「あああっ、いやあっ、許してっ」
「言わないってことは、浣腸でもいいんだな？」
遺作は達している琴未の股間を舐め続け、さらに高みへと押し上げていく。
「だめ……だめ……いやあああああああああああああっ」
「おおっ、まんこが動く様子がはっきりと分かるぞっ」
すでに一度カメラの前で絶頂を極めていた琴未は、今度は性器の動きまでも克明に記録された、完全なエクスタシーシーンを撮られてしまう。
「ああああああああああああっ」

カメラに向かってお尻を突き出した琴未は、自分では抑えられないほど長い喜悦を極めてしまった。

3　歪んだ性愛教育

画面の中であられもない姿を晒す琴未を、陣八は呆然と見詰めていた。

（お、俺のせいで……）

押し潰されそうな後悔が肩にのしかかってくる一方で、陣八の股間は制服のズボンを突き破りそうなほど硬くなり、行き場のない熱い塊が出口を求めて睾丸の辺りにわだかまっている。

テレビ画面は、埃っぽい体育用マットの上でカメラに向かってM字開脚を強いられている琴未を表示していた。

スカートと下着は脱がされたまま下半身には何も着けておらず、恥毛や秘裂が丸見えになっている。上半身の制服もはだけられて両胸が露呈しており、性的興奮で硬くなった乳首が密やかに息づいていた。

遺作は琴未を背後から抱き締めるように座り、身体を密着させている。片手で胸を掬うように揉みながら、もう片手ではあれだけ嬲った性器をさらに弄り回していた。

「派手にイッたじゃねえか、全身をピンクに染めてよぉ……」

「ぁ……うぅ……」

琴未は恥ずかしさで前を向くこともできず、うつむいている。

もしこの場に琴未がいれば、すぐに停止ボタンを押すことを望むことだろう。
「だが、俺が教えたセリフを言わなかったな。ってことは、浣腸をしてほしいってことだな？」
「い、いやっ、違うっ」
「浣腸されるのは初めてか？」
遺作が耳たぶを甘噛みしながら囁く。
「お願い……やめて……」
「どうなんだ？」
遺作は乳首を強くこね回して答えを強要する。
「は、初めてです……」
「そうか、じゃあ人前でウンコするのも初めてだな」
「い、いやああっ」
常軌を逸した宣告に、琴未は一拍おいてから恐怖に引き攣った悲鳴を上げる。
「ちゃんとカメラで撮っててやるからな。クラスのみんなにも見せてやったらどうだ？」
「い……いや……」
「お前のような女もウンコするんだって教えてやれよ。学校一の美少女がケツの穴丸出しで脱糞するんだからな、男子共は歓喜するだろうぜ」

（こ、こいつ、琴未ちゃんにそんなことまでするつもりなのか……）
陣八は頭に血が上るのを感じ、無意識に唇を噛んでいた。もし遺作が自身の言葉を実行に移していたら、テープの続きにはおそらく琴未の最も悲惨な姿が収められていることだろう。
（ち、ちくしょう……）
好意を寄せている女の子が遺作に変態的な行為をされたかもしれないと思うと、陣八はどろどろとした暗い感覚が全身の血管を駆けめぐるのを感じた。
その一方、若い性器は勢いよく立ち上がろうとズボンの中で窮屈にしており、目の前で好みの女子が陵辱されるという被虐的な味を求めているかのようだった。
「やぁああ……ぅう……」
琴未の目尻からこぼれる大粒の涙を、遺作が舌を伸ばして舐め取る。
「俺の浣腸液は、特製の媚薬が入ったスペシャルブレンドだからな。お前もたっぷり楽しめるぜ」
遺作は鞄からリモコンを取り出すと、カメラの斜め後方に向けていくつかボタンを押した。おそらく部屋の角に置かれたいたテレビかビデオを操作しているのだ。
ビデオデッキにはすでにテープがセットしてあったらしく、記録されていた内容がすぐに再生され始める。
遺作たちが使っているテレビはカメラの裏側に置かれているため、何が映っている

のかは、音声と二人の様子から窺い知るほかない。
「あ……」
再生が始まった瞬間、琴未は信じられないものを見たかのように目を見開いた。
「もうダメェッ――」
琴未のものとは違う少女の絶叫が、スピーカーから飛び出てくる。
（誰の声だ？）
確かに聞き覚えのある声だったが、一度スピーカーから発せられた音を拾っているため音声が歪んでおり、判然としない。
何かを考える余裕もなく、悲鳴に続いて卑猥な破裂音が響き渡る。
（こ、これは……）
特徴的な音だったため、何の音であるかは琴未の表情を窺うまでもなくすぐに想像がついた。
「凄い出しっぷりだろう？　これが、あんたが今からやる浣腸セックスだ。どんな生意気な雌犬でもこんなふうに犯してやったら、泣きながらうんこを撒き散らすんだ」
「い……いや……」
琴未は、魅入られたように画面から目を離せずにいる。
「くっくっく、随分興味があるみたいだなぁ。浣腸セックスが、そんなに気に入ったのか？」

「ち、違うっ、違うわっ」
琴未は顔を真っ赤にして首を振る。
「隠さなくてもいいんだぜ。お前がスケベな女だってことはもうばれてるんだからよお」
「許して……お願い……」
「お前のためにしてやってるんだぞ。このままだと、嘘つきな大人に育っちまうからねぇ。俺がたっぷりとお仕置きして、正直ないい子にしてやるよ」勝手な理屈を臆面もなく口にできる遺作は、自省という行為をした事がないのだろう。「男に対する奉仕の仕方も覚えないとなぁ。習い事は熱心なようだが、男の悦ばせ方は知らないんだろ？」
「ああ……いやぁ……」
沸騰する羞恥心と陵辱の予告で混乱した琴未は、呆然としたまま遺作に身体をまさぐられている。
上気した琴未の肌を遺作は満足げに見詰めながら、うなじから背中まで唇を滑らせて汗を舐め取っている。遺作は琴未と会話しながらも手は休めず、乳首や肉芽を撫で回していた。手だけでなく口も使い、琴未の首筋や耳たぶを舐めたり吸い上げ、あらゆる性感帯を刺激しようとしている。
「今日は普通のセックスだけじゃなくて、浣腸やアナルセックスまで教えてやるよ。

お嬢さんには刺激が強すぎるかもしれないがねぇ」
「だ、だめ……そんなこと……」
「本当に嫌なのか？　興奮して、乳首がこんなに硬くなってるじゃねえか」
遺作は青ざめる琴未の顔を覗き込みながら、ねちねちと乳首を弄っている。
「違うっ、違うわっ」
「二回もイッたくせに、セックスが嫌いってことはないだろうがよぉ。ここはこんなに濡れてるし、早く入れて欲しくてたまらないんじゃないのか？」
琴未は秘唇を指で広げられ、性器の内部までもカメラに撮られてしまっている。てらてらと光る粘膜の上を遺作の太い指が這い回り、窪みにできた蜜のぬかるみをくすぐるように刺激している。
「ここに俺のちんちんが入るんだぞ」
「い、いやよ……絶対」
「俺のも、こんなになってるぜ」
遺作がさらに身体を密着させ、股間の膨らみを琴未の腰に押し当てる。
「い、いやぁっ、そんなもの押しつけないでっ」
琴未は反射的に背筋を伸ばし身体を離そうとするが、遺作に抱き竦められている姿勢ではもちろん逃げられるはずもない。
「見たいか？」

「え……？」
「お前の初めての相手になるペニスだよ。見てみたいだろ？」
「い、いやっ、見たくないっ」
「ふん、また嘘をついたな」遺作は琴未から手を放すと彼女の正面で仁王立ちになった。「くくく、俺のは他の男共のとは違う、スペシャルな逸物だぜ」
遺作はジャージのズボンに手をかけると、一気に引き下ろした。
「ひっ……」
思わず琴未が息を呑む。
股間を隠しているのは、遺作には似合わない黒いビキニパンツだ。別段小さなサイズの下着ではないのに、収められているものがよほど大きいのか、盛り上がり方が普通ではなくはち切れそうになっている。尋常であればビキニを履いた股間は丘のような隆起になるはずだが、遺作の場合は内部のものが山嶺のように布を持ち上げ、陰毛が覗くほど太股との隙間が空いていた。
「あんたが色っぽい声を出すからよぉ、俺のがでっかくなって、きつくてしょうがねえや。脱がせてくれよ」
「い、いやよ……できない」
「くく……もう『できない』なんて答えはないんだよ。俺が裸になれと言ったらあんたは服を脱がなきゃいけないし、ケツの穴を見せろと言ったら尻を広げなきゃならな

いんだ」遺作は後退る琴未の両手を掴み、自分の腰に持ってくる。「ほれ、さっさと言う通りにしないのなら、いきなり浣腸しちゃうぞ」
「うう……あぁ……」
遺作の前で跪いた琴未は目をつむって顔を背けながら、恐る恐る下着を引き下ろしていく。
常人離れした巨大な生殖器が、琴未のすぐ目の前で跳ね上がった。遺作の肉棒は狭い場所に長時間押し込まれていたせいか岩のように硬くなっており、開放された瞬間バネ仕掛けのように弾き上がってバチンと腹を打つほどだった。
「きゃあああっ」
反射的に音のする方向を正視してしまった琴未が、悲鳴を上げる。
「ほうれ、よく見るんだ。これがお前が処女を捧げる、ありがたいペニスだ」
遺作は琴未の頭を掴み、無理矢理肉棒のほうへ顔を向けさせる。もう片方の手は巨根に添え、少しでも近くで剛直を見せつけようとしていた。
針金のように硬い陰毛が密集し、その深い草むらから巨大な幹が生えている。
「どうだ、でかいだろお？　この状態のちんぽを見るのは初めてだよなぁ。しっかり観察してみろ」
自慢するだけのことはあり、遺作のペニスはゆうに二〇センチを超えている。どす黒い色をした胴部でさえ五センチ以上の太さがあり、ぼこぼこと血管が浮き出ていた。

目を見張るのは暗い紫色の尖端部で、カリ首が大きく外へ張り出し、電灯の明かりを受けて輝くほどパンパンに張り詰めている。肉棒は遺作の性欲旺盛さを表しているのか、木材のように硬くなっており、その具合は外から見てもはっきり分かるほどだ。本人の興奮具合を示すようにほとんど真上を向いて反り返り、すでに滲み出した透明な粘液が鈴口で玉のように盛り上がっている。

「いやぁ……いやぁ……」

あまりの大きさに、琴未は恐怖に震えながらも肉棒から視線を外せずにいる。

「ほれ、これが今からお前の中に入るんだぞ」

遺作のペニスは異常な勃起力を誇り、手を添えていないと腹に張り付くほどの角度で持ち上がる。

「や、やめて……お願い……」

「俺も裸になるからな、お前も服を脱いでもらおうか」

言いながら、遺作はジャージの上もシャツと一緒に脱ぎさる。

「い、いやっ」

琴未が毛深い男の全裸から目を反らす。

「カメラの前でケツの穴まで見せたくせに、今さら恥ずかしがることはねぇだろ？」

「うう……」

「脱がないのなら、このまま犯しちゃうぞ」

遺作が数度脅迫すると、琴未はようやくのろのろとした動きで制服を脱いだ。スカートとパンツはすでに取り去られていたため、琴未の身体を飾るものはソックスと靴以外には頭のリボンしかない。

（こ、琴未ちゃん……）

琴未の全裸を目にした陣八は、ごくりと唾を飲み込んだ。

「綺麗な身体じゃねえか。俺の息子も、ますます元気になってきたぜ」

足を閉じ乳房を抱いてうずくまる裸の琴未を、前を隠そうともせずむしろ誇示する遺作が見下ろす。

「まずは、お前を悦ばせるペニスに感謝のキスをしてもらおうか」

「なっ――」

「キスだよ、キス。先っぽに口づけをしてみろ」

遺作がにやつきながら、琴未の口元にペニスを突きつける。

（この野郎……）

陣八は体温が上昇しているのに気付き、シャツのボタンを一つ外した。

「いやっ、できないっ」

「フェラチオもできないようじゃ、俺の授業には合格できないぞぉ」

「んんっ……んうっ」

琴未は硬く勃起した肉棒を無理矢理唇にあてがわれ、嫌々をして抵抗している。

「く、臭いっ」
「ご挨拶だねえ、臭いのなら、お前が舐めて綺麗にするんだよ」
「ううっ……んぅ……」
遺作は剛直を強引に唇に押し当てるが、琴未は歯を食いしばってそれ以上の侵入を阻止している。しかし敏感な部分で唇や歯列をなぞるだけでも心地よいらしく、遺作はだらしなく顔を歪ませている。
「そんなんじゃねえ、ディープキスだよ。この先っぽに舌を絡める、ねちっこいキスをしてみろ」
「ううっ……んんっ……いやぁっ」
遺作の肉棒と琴未の唇の間で、粘液が糸を引いている。
「お前がちんぽくわえるところを、健太も見たがってるぜ」
「んうっ――」
健太の名前が出た瞬間、一瞬琴未の防御がゆるんだ。その隙を突いて、遺作の肉棒が顎を割って口内に押し入る。
「んんうううっ……ううううんっ」
「おおおうっ……いいぞぉ……」
「ううん……んんぅう……」
規格外のサイズのため、琴未は口をいっぱいに開いてペニスを頬張る。遺作の生殖

器は余りにも長大なため、亀頭部の辺りしか口内に収めることができない。吐き出そうとしても両手で頭を抑えつけられているため動けず、かといってフェラチオなどという性技は知らないため、琴未は男の肉棒をくわえたままじっとしているほかなかった。

「はあはあ……歯を立てるんじゃねえぞ……」

ゆっくりと、遺作が腰を使い始める。

小刻みなストロークで、逞しいくびれが姿を現したかと思うと、すぐに押し込まれる。動くたびに、琴未の柔らかな唇に包まれた醜悪な肉棒が、嬉しそうに跳ねる。

「いい格好だねえ。処女のお前が、全裸で俺のちんぽを舐めてるんだからよぉ」

「ううっ……」

「学校中の生徒が、夢にまで見た光景だろうなぁ。健太の奴も、これを見れば股間を硬くするだろうぜ」

「んうううっ……」

琴未が涙目で遺作を見上げ、視線で哀願する。

「初めてのフェラチオは健太君がよかったのかあ」遺作は肩を揺すり、喉元から出てきそうな笑いをこらえている。「残念だったなぁ。お前の初めては、何もかも俺が奪ってやるからな」

「ううん……ううううう……」

「はあはあ……もっと舌を使え。先っぽを舐め回すんだよ」
「んん……ううんんん……」
遺作は容赦なく指示を飛ばすが、処女の琴未に大胆な舌使いなどできるはずもなく、時折舌先が触れる程度の刺激しか与えられない。
「処女だからフェラテクは全然だな。なあに、すぐに上達するように俺が鍛えてやるよ」
業を煮やした遺作が一旦肉棒を引き抜いた。巨根は唾液でてらてらと光り、天を突く角度で勃起している。
口を塞がれていた琴未はうつむき、荒い呼吸を繰り返す。
「も、もう許して……」
「くっくっく、許してやってもいいんだぜ。俺を気持ちよくさせたらな」
「え……？」
思わぬ答えに琴未が顔を上げる。
遺作は近くに倒れていた椅子をマットの横に据えてそこに座り、さらに鞄から目覚まし時計を取り出した。
「さっきみたいにフェラチオして、一〇分で俺をイカせてみな。そうすればここから出してやるよ」
意味を充分に理解できず琴未が戸惑っていると、遺作が浣腸セックスを見せつける

のに使ったもうテレビを操作する。
「あ……いや……」
どうやら少女が口奉仕に勤しむ様子が再生されているらしく、琴未は青ざめる。
「やり方は分かっただろう？　こうやって俺が精液を放出したらお前の勝ちだ。何もせずに、ここから出してやるよ。ビデオもお前に返してな」
「……」
当然だが琴未は疑り深そうな目付きで遺作を見やっている。
「ただし、一〇分たっても俺をイカせられなかったら、俺のちんちんをお前のまんこに入れさせてもらうからな」
「そ、そんな……」
「くくく、勝負はフェアじゃねえとなあ。勝ったらご褒美、負けてもペナルティ無しなんて甘い話が世間にあるはずがないだろう？」
「や……許して……」
処女を奪われるという罰ゲームの過酷さに、琴未は肩を抱えてがたがたと震えている。
「いいんだぜ、別に。嫌なら今すぐセックスしたって。お前の子宮を突きまくってたっぷり精液を注入するビデオを、いち早く健太に見せてやれるからなぁ」
「い、いやっ、健太君には見せないでっ」

「くっくっく、時間を稼いでいれば、そのうち健太君が助けに来てくれるかもなあ」
ほとんど可能性のない期待をちらつかせて、遺作は琴未の心を揺さぶる。
「……」
「どうなんだ、お嬢さん」
「し、します……」
「するんだな？　俺のちんちんをおしゃぶりするんだな？」
「は、はい……」
「じゃあ、始めるぞ」遺作は嬉々とした表情でタイマーをセットする。「ベルが鳴ったら、処女喪失だぞ」
「う……」
顔を引き攣らせた琴未が遺作の方へにじり寄る。
椅子に座った全裸の遺作は脚を大きく広げ、ほとんど真上に立ち上がった巨根を琴未とカメラに見せつけている。
目に涙を溜めた琴未が、臭気を漂わせる巨大な生殖器に口を寄せようとした。
しかしその可憐な唇が汚いペニスに接触する直前に、遺作が頭を抑えてとどめる。
「まだだよ。フェラチオしたいのなら、正座して『遺作さんのおちんちんをしゃぶらせてください』って言ってみろ」
「そ、そんなことっ……」

余りの要求に琴未は絶句する。
（へ、変態め……）
陣八は怒りのせいか下半身に集中した熱い感覚のせいか、息苦しさを覚え呼吸が荒くなっていた。
「俺の肉棒は外人好きの女からは、プラチナコックって呼ばれてるんだぜ。そのありがたい肉棒を舐められるんだ。挨拶無しはねえだろうよ」
「いや……い……言えない」
「もうゲームは始まってるんだ。時間が無くなっていくぞ」
遺作は時計を指し示すと、意地悪く身体を離した。
「あ……う……」
「ほれ、『遺作さんのおちんちんをしゃぶらせてください』だ」
「い……遺作さんの……お……お……おちんちん……をしゃぶらせて……」
琴未の揃えた膝の上に、ぽろぽろと涙がこぼれる。
「『ください』だろ？」
「ください……」
「最初から言ってみろ」
「うう……」
ぽろぽろと涙をこぼしながら、琴未は屈辱の台詞を口にした。

「もう一分無駄にしたぞ。……よし、まずは舌で全体を舐めるんだ。唾液でちんちんを濡らすんだ」
遺作に触れることを許された琴未は口を寄せ、おぞましい器官に舌を伸ばす。
「うぅ……」
舌先を触れさせただけで嫌な味が広がったのであろう、琴未は思わず舌を引っ込めてしまう。
「手で持つんだ。舐めるだけじゃなくて、上下に擦れ」
遺作の男性器は腹に張り付くほどの勃起力のため、手で角度を変えなければ口に収めることすらできない。
琴未は指示に従ってペニスを握ろうとするが、尋常ではない熱さと硬さに加え脈動する不気味さに怯み、握りしめることができない。
「熱いだろう？　お前に興奮してこうなってるんだぞ。イカせられなかったら、これがお前の中に入るんだからな」
「い、いや……」
「嫌なら俺をイカせてみな」
琴未は目をつむり、熱く膨張した先端部に舌を押しつける。おぞましい味を我慢しながら、つるつるとした表面を舐め回す。
「う……いいぞ……先っぽだけじゃなくて全部を舐めるんだ。特にくびれの裏側を重

点的に舐め回せ」
遺作の言葉通り、琴未は亀頭から胴部へと舌を滑らせ、唾液で濡らしていく。
「ん……んう……」
「よおし……手で擦りながら、先っぽをくわえてみろ」
琴未はしばらくためらっていたが、意を決して遺作を受け入れる。逞しい亀頭がすっぽりと小さな口内に収まり、限界まで口を開いた琴未が苦しそうに顔を歪めている。
「ううう……ううん……」
「おお……いいぞぉ……くわえたまま、先っぽの割れ目に舌を押しつけろ。舌を尖らせて、くじるんだ」
ペニスをくわえた琴未の頬が動き、口の中で舌が蠢いていることが見て取れる。
「ううぐぅ……ううんん……」
唇と剛直の隙間から唾液が溢れ出し、全体をさらに濡らしていく。
(琴未ちゃんが、こんな奴の……)
信じたくない現実を突きつけられ、陣八は涙がこみ上げ視界が定かではなくなる。
気が狂うほど悔しいはずなのに、陣八のペニスは今までにないほど興奮しきっており、痛みを覚えるほどだった。ズボンを脱いで男根を解放したかったが、それをしないのは欲望に負けたようで情けないからだ。
「はあはあ……あと五分だ。くわえたまま、舌を使って先っぽを舐め回せ」

琴未は舌を踊らせ、風船のように張り詰めた亀頭をしゃぶる。
「うう……いいぞぉ……。どうやらフェラの才能があるようだな。男のちんぽが好きでたまらねえってしゃぶり方だ」
「んんっ……ううううっ」
抗議しようとした琴未だったが、巨棒を押し込まれて声にならない。
「くっくっく、もうあと四分だぜ。早くイカせねえと、ちんぽしゃぶったのに処女を奪われるってことになりかねねぇぞ」
「ううううっ……ううんんん……」
「はあはあ……いいぞ……そうだ……くびれの裏側が一番男が感じる場所なんだ。そこを重点的に舐め回してみろ」
「んんん……ううん……」
「次は出し入れだ。唇を押しつけながら頭を上下させて出し入れするんだ」
何もかも初めての琴未に、遺作は容赦なく性のテクニックを教え込んでいく。
遺作の股間に顔を埋めた琴未がゆるやかに顔を動かし、抽送運動を始める。出し入れが切り替わる前後の一瞬だけ、ちろちろと亀頭を舐め回す舌が外部からでも見え隠れしている。
「そんなゆっくりでいいのかぁ？　あと二分だぜ」
「んんっ……ううううっ」

「くく……元気が出てきたようだが、間に合うかな？　あと少しで俺をイカせないと、このでっかい肉棒で処女を失うことになるんだぜ」
「ううん……んうぅ……」
遺作は懸命に舌を使う琴未の様子を見て楽しんでいる。
「おおっ……いいぞ……イキそうだ……」
射精の予兆に、遺作が顔をしかめる。
「うう……んんん……」
「うう……巧いぞ……もう少し……」
――ジリリリリッ
だが無情にも、そこでベルが鳴った。
ペニスをくわえた琴未の顔色がサッと蒼白になる。
「くっくっく、惜しかったねえ。あと少しでイカせられたのに」遺作は琴未の口内から剛棒を引き抜くと椅子から立ち上がる。「最初の一分のロスがなかったらお前が勝ってたかもなあ」
「い、いやぁ……」
達しかけていたという遺作の言葉は、演技に違いなかった。遺作ほどの経験があれば、射精をある程度コントロールできるのだろう。勝負が分からなかったというのは琴未を嬲るための嘘で、最初から彼女には勝ち目のないゲームだったのだ。

「さあお嬢さん、一〇分で射精させられなかったら、何をするんだったかな？」